

哲学教育ワークショップ

哲学教育ワークショップ 「哲学対話と哲学研究」

梶谷真司（東京大学）

昨今、どうやら哲学が“流行り”らしい。

2015年10月、哲学カフェや哲学教育など、対話型の哲学に関心をもっている人たちの交流の場として、第一回哲学プラクティス連絡会が開催された。来場者は100人を超えた。昨年第2回はそれが倍増。そのほとんどが、社会人、主婦、教員、高校生、学生など、一般の人である。子連れで来た人たちもいた。男女比もほぼ半々くらいだっただろうか。女性のほうが多かったかもしれない。特に昨年は、ブースやプレゼン、ワークショップなど、一般の人が応募する枠も設けられ、多種多様な企画が持ち込まれた。その関心の高さには、目を見張るものがあり、今年の第3回がどうなるのかは、予想もつかない。

また「子どものための哲学 (Philosophy for Children)」や哲学教育に関する本も次々に出版され、テレビや雑誌でも特集が組まれる。思うに、これほど哲学に対する関心が広がったのは、歴史上初めてではないだろうか。こうした傾向は、何も日本ばかりではない。教育をはじめとする実践としての哲学は、国際学会も盛況で、世界中から多くの人が集まり、日本からも毎年かなりの人数が参加している。

このような状況は、それじたい歓迎すべきことであるが、現場で様々な“混乱”も起きている——哲学対話の実践者の間でも参加者の間でも、哲学対話と普通の対話はどこが違うのか、どういうふうにしたら対話が「哲学的」になるのか、といった疑問が出てくる。

哲学対話という哲学のスタイルを認めたくない研究者や哲学好きな人は、「あんなのは哲学じゃない」と言ったりするが、ではそこで言う「哲学」とはいったい何なのかは、それほど簡単に答えられる問題でもないだろう。

逆に哲学対話に関心を持ち、みずから活動する学生や研究者は、専門とする哲学や研究という営みとどのように関係しているのか、問わずにはいられない。研究に悩んでいるうちに、哲学対話の方が面白くなって、「これこそ哲学だ！」と言い出す人もいる。

教育現場に導入したいと考える学校の先生や、自分で対話の場を作っている（作ろうとしている）人は、いつ、どこでするのか、ファシリテーションはどうすればうまくできるのかといった、哲学対話そのものではなく、技術的な悩みを抱えている。

一方では、哲学は相変わらず訳の分からない変人の知的道楽、役に立たない自己満足の屁理屈のように思われていて、他方では、もともと哲学と無縁であったような人たちの間で急速に関心と期待が広がっている。こうした相矛盾する動きは、ともすると、互いに否定しあう。研究者の一部は、哲学対話の広がりによって反発を覚えたり、危機感をもったり、無視したりする。対話に興味をもつ人たちは、訳の分からない難解な哲学を忌避することがある。

しかし、哲学というのは、歴史的にたえず自己省察と自己批判、場合によっては自己否定を行ってきた。いかに多くの哲学

者たちが、自分たちがやっているのこそ哲学であって、今までのはまやかしだ、と言ってきたか。そのたびに哲学は動揺し、再定義を迫られ、新たな地平を開いてきた。そういう意味では、哲学対話の登場をきっかけに様々な議論が巻き起こっていることじたい、哲学対話が新しい哲学の形であることの証左であろう。それをどのように受け止め、位置づけるのかは、研究者にとっても、一般の人にとっても、些細な問題ではない。

したがって今回、日本哲学会において、「哲学対話と哲学研究」というテーマで、あらためて「哲学とは何か?」と問い、「対話」と「研究」の関係を考えるのは、きわめて意義のあることだ。この問題は、おそらく哲学対話が始まった当初から、それぞれの現場で問われてきたと思われるが、哲学対話への関心が急速に高まっている今は、この問題を共有し、いろんな立場から考えてみる絶好のタイミングだと言える。

私の個人的な考えはさておくとして、ここでは司会者として議論のきっかけを作るべく、哲学対話に関わる立場に応じて考えるべき問いを思いつくままに記しておこう。

研究者以外の一般の人の場合

- ・哲学対話は、普通の対話とどこが違うのか。
- ・どうなれば、対話が哲学的だと言えるのか。
- ・対話を哲学的にするには、どうすればいいのか。
- ・哲学の知識はあったほうがいいか。
- ・哲学を学ぶとしたら、どんな本がいいか。
- ・哲学的でなければいけないか。
- ・ファシリテーションはどうすれば上手になるか

研究者の場合

- ・哲学に対話は必要か。
- ・哲学の議論と対話はどこが違うのか。
- ・哲学のことを知らないのに哲学になるのか。
- ・哲学対話は研究のためになるのか。
- ・哲学の研究は対話に役立つのか。
- ・哲学対話もやったほうがいいのか。
- ・対話をやったら、研究ができなくなるのか。
- ・哲学の研究は常に哲学的か。
- ・哲学の研究を哲学的にするにはどうすればいいか。

教育関係者

- ・哲学対話はどのように評価すればいいのか。
- ・対話はそもそも評価すべきか。
- ・哲学対話はどのように授業に組み込むといいか。
- ・哲学教育の教材にはどんなものがあるか。
- ・社会科で教える倫理とどのように違うのか。
- ・哲学教育は何のために役立つのか。
- ・哲学対話でどんな能力が身につくのか。
- ・教師はどのような役割を果たすべきか

他にもいろいろあるだろうが、その根底には、共通する問いがある。それはまさに「哲学」とは何か、「哲学的」とはどういうことかという哲学そのものへの問いなのだ。

母親が哲学対話をするということ

尾崎絢子 (はなこ哲学カフェ)

「哲学カフェの活動と哲学の専門知識や専門研究者の関係」について、普通の主婦である私たちに何を語ることができるだろうか。恐れ多くて語ることはできないが、これまでのはなこ哲学カフェの活動を通して感じ得た「哲学」というものに関して振り返ってみたいと思う。

哲学カフェの活動の中で、たびたび「哲学対話における哲学とは何か」という話題に触れる。その中で「真実を探求すること」という言葉に出会った。「真実の探求」。これが「哲学をすること」だとすれば、私たちのしていることは「真実を探求」していることなのだろうか。いや、どう考えてもそんなに壮大で難解なものに立ち向かっているとは思えない。思い返せば私たちが抱えている「問い」はいつも、今ここで、この場所で、日々の暮らしの中から紡ぎだされている「問い」だ。もっと言えば「悩み」である。母親は子育ての中で、毎日多くの「悩み」と出会う。その悩みを解決しようと、育児書や教育書を読んでヒントを得ようとしたり、誰かに相談して心の負担を軽くしようとしたり、四苦八苦する。しかし、育児で出会う「悩み」は実に難問で、時に「人それぞれだよな」とか「難しい問題だよな」という体(てい)のいい言葉で自分を納得させ、無理やり蓋を閉じる。そうして心の奥底に閉ざされた「悩み」は、頭の片隅にモヤモヤや腑に落ちなさを残しながら、「苦しみ」へと変化していく。

哲学を学んだことがない私たちに「哲学が何か」が分かるわけはないのだが、哲学対話は少なくとも私たちにとって「母親」から「私」に戻れる場所であるように思う。それはもしかしたら何物でもない「私」について探求する、ということなのかもしれない。そして、日々押し寄せてくる「悩み」は「考えること」でまったく違う景色が見えるようになる、ということも教えてくれた。

「すごく興味があるけれど、考えるのが怖い」

昨年9月に開催した「哲学ドラマワークショップ」に参加してくれた母親の1人が、こんな発言をしてくれた。ああ、自分だけじゃない。きっとみんなどこかで、自分なりの「問い」にぶつかっているんだ。そんなことを実感させられた一言だった。頭の片隅にあるけれど、改めて深く考えることでもしかしたらこれまで信じていた何かが足元から崩れていくかもしれないその恐怖を、何となく肌で感じているのかもしれない。哲学の知識があるわけではないけれど、確かに感じるこの「感覚」は「哲学」なのだろうか？この正体はいったい何なのだろう？

確かに私の中にある問いなのに、「哲学」という言葉を使うと急に高い壁で仕切られて、難しくて頭が良い人がすることになり、「私」から遠く離れてしまう。「哲学対話」がもたらしてくれる世界は「解放」や「自由」なのに、その一方で「哲学」という言葉がなぜかそれを奪ってしまうような気がする。

「母親」は「哲学をせざるを得なくなった人」なのかもしれない。

専門知識も何もない私たちが望むのは、この素晴らしく楽しい世界をもっと分けてほしいということだ。「知識がなければ哲学ではない」のはその通りかもしれない。でも、だからやっではいけない、と言われたらとてつもなく悲しい。哲学対話の中でたびたび出会う「世界がまったく違うものとして見えるこの瞬間」を奪われたら、この先私たちはどう生きていったらいいのか。そんな言い方は大げさかもしれないけれど、確実に私たちの生き方に大きな変化をもたらした「哲学対話」をもっと知りたい、そして知ることをほんの少しでいい、許していただけたらこの上なく幸いなのである。

哲学対話と哲学研究との関係をめぐって

梅田孝太（上智大学非常勤講師）

本提題は、19世紀ドイツ哲学の研究者であり、また哲学カフェ（2011年5月より毎月一回都内にて開催）の実践者でもある発表者の立場から、非専門家の参加者との対話の場でもある当日のワークショップの性格に鑑みつつ、哲学対話と専門的哲学研究との関係について考察するものである。

哲学対話／哲学カフェという場における自由

昨今メディアでも多く取り上げられているとおり、日本各地で哲学対話ないし哲学カフェという試みが行われるようになってきた。その多くは「ファシリテーター」と呼ばれる司会進行役を置き、専門用語を使わずに身近なテーマについて自由に対話するという方式をとっている。ファシリテーターは哲学を専門とする研究者である場合もあれば、在野のアマチュアである場合もある。対話の場によって様々なルールが設定されているものの、基本的に参加者は何を言ってもよい。周囲のひとを攻撃したり、権威ぶったりしない限り。普段は空気を読んで口を差しはさまずにいることに、当たり前だとされていることに、疑いの目を向けてよいのだ。そうして参加者たち自身が問いを出しあい、共に考えることに力点が置かれている。見知らぬ者同士であった参加者たちが互いを尊重しつつ問いあい、思い込みから自由になり、学びあうことのできる場。こうした場が残念ながら今日の日本社会では稀有にして得がたい場であることは言うまでもない。哲学対話の場では、ファシリテーターが研究者であろうとも、専門研究で得た知識を参加者に教育することはない。参加者もまた、自らの知識をひけらかすことはせず、伝わりやすいことばづかいをすることが求められる。多くの哲学カフェがそうしたルールを定めているのは、知識が権威となって、対話の場が実現するはずのせつかくの自由を阻害することが危惧されているからであろう。

哲学対話と誠実さ

しかし、ここでさまざまな疑問が頭をもたげてくる。そもそも哲学は、語源にさかのぼって考えるなら、「知への愛（フィロソフィア）」ではないのか。哲学対話なのに、知識を重視しないのはおかしいのではないのか。対話の内容が論理的な正しさに導かれ、知識に結実してこそ哲学なのではないのか。知識は平易なことばづかいに溶け込んで対話の質に影響を与えるのではないのか。専門家がファシリテーターをするとき、知識をもっているのにそれを正確に伝えないのは不誠実なのではないか——。

以下では、哲学対話の場における「誠実さ」と知識との関係について考えてみたい。たとえば、あらかじめ一定の知識が対話の設計図や目的地となってしまうならば、ファシリテーターがそれを前提とするのは参加者に対して、また対話の内容に対して、不誠実な態度ではないか。見知らぬ他者としての

対話の参加者は、何を考えているのか予想もつかないブラックボックスのような存在である。その他者の前では、いかなる既存の知識も可謬的であり、自分の考えが刷新されることを期待できる。このことを認めるのが他者に対する誠実さというものではないだろうか。知識に固執することは哲学対話の場では他者に対する不誠実であり、避けるべきことだということになる。

だが、「知への愛」としての哲学の名を冠する以上、哲学対話は「知」を誠実に希求することを本質とする営みであるはずだ。ここでいう「知」は一定の成果物としての知識ではなく、あこがれの先にある「真理」なのだと考えるならば、それを目指し続け、愛し求める営みを哲学的と呼んでさしつかえないだろう。哲学は真理の探究である——しかしながら、いやそれゆえに、哲学の本質についてのこの知識そのものをも自ら問いに付す。このようにして、哲学対話という草の根の試みは保守的な専門研究者が抱いている「哲学というもの」の既知の像をも揺るがし、変質させ始めているのではないだろうか。

哲学研究者と哲学対話との幸福な関係？

アカデミックな哲学の専門研究と在野の哲学対話の試みとの関係をめぐって、もうひとつ検討しておきたいことがある。専門研究者が日々格闘している哲学書研究の意義である。上述のとおり、哲学対話の場で専門研究者がファシリテーターをつとめるとき、研究で得た知識に固執することは不誠実な態度だと考えられる。専門用語を口にして参加者を委縮させたり、暗に対話を誘導したり、参加者に何らかの訓示を与えようとしたりするのでも不誠実な態度である。では、哲学書の専門研究は、ファシリテーションを行う際に、何ら良い影響を及ぼさないのだろうか。そうではないだろう。そもそも文献を研究するということは、独自の思想を打ち出すのではなく、先人の問いを誠実に聴き取り、解釈を与え語り直すということである。研究者は自らの解釈を先行研究との間に位置づけ、他の研究領域とも接続し、一般向けに紹介していく。つまり、優れた人文学研究者は、他者の考えに耳を傾け、それを共有していくという解釈の技法に秀で、日々その研鑽を積んでいるはずなのである。以上のことをふまえれば、哲学書研究の技能は、他者のことばを誠実に聴き、共有していくための議論の交通整理ができるというファシリテーションに欠かせない技能と関連していかねばならない。逆もまたしかり。文献をひもときと同様の誠実さや好奇心をもって対話の場における他者と接するという——研究者にせよアマチュアにせよ、優れたファシリテーターであるために互いに学ぶところがあるのではないだろうか。

以上、哲学書研究と哲学対話との類似性を「誠実さ」という観点で考察することを試みた。もちろん両者には一定の差異も認められるだろうが、共通して問題にできるのが、知識に権威的なふるまいをさせるかどうか、という指標なのである。

良きファシリテーターのための哲学史

小村優太 (東京大学)

哲学対話という実践形式にとって、いわゆる「哲学史」の知識がどのように関係するかという問いは、少なくとも日本における哲学対話実践の場において、これまであまり論じられてこなかったと思われる。というのも、哲学対話という実践そのものが、既存の哲学史の知識に対するアンチテーゼのような性格をもつためだ。たとえば哲学対話の場において、哲学史や哲学の古典にかんする知識が必要かという問いを挙げれば、一方の端には「哲学対話の実践において哲学史の知識はまったく必要ない」という立場があるだろうが、もう一方の端に「哲学対話の実践には哲学史の知識が必要不可欠である」という立場は出て来そうにない。それでは、哲学対話という実践において、哲学史はどのような役割をもっており、そしてもっていないのか、その点について少し考えてみたいと思う。マシュー・リップマンなどが哲学対話を形容して「ソクラテス的対話」といったような言葉を用いることはよく知られている。それは哲学対話に挑む際の態度を形容するための語であり、必ずしもプラトンの対話篇に描かれたソクラテス（ましてやクセノフォンやアリストファネスによって描かれたソクラテス）を反映してはいないのだが、ここで哲学対話が哲学史のひとつの起源であるソクラテスという人物を持ち出してきていることは興味深い。おそらくそれは、彼岸的思想の大成者プラトンや、学としての哲学の制定者アリストテレスでは駄目なのだろう。自らは決して一文字も書かず、ついで体系的思想を残さなかった、理想的思想実践家としてのソクラテスこそが哲学対話の起源に持ち出されるのに相応しい。そしてここにこそ、哲学対話が哲学史に対してもつ微妙な関係が現れているとも言えるのではないか。

以上のように、少なからず「反哲学史」的性格をもった日本の哲学対話実践であるが、果たして哲学対話の実践において哲学史の知識が「役に立つ」のか、それとも「邪魔」にしかならないのかという点について考えてみたい。まず確認したいのは、日本の哲学対話実践において、ある程度指導的立場にいる人間は何らかの形で大学という教育機関において専門の「哲学」教育を受けていることが多く、そういった人間は同時に「哲学史」の知識を多かれ少なかれ習得しているという事実である（もちろん個々人の受けた教育の性格によって、その知識の濃淡にはバラつきがある）。つまり現状において大学人の哲学対話実践家は、「哲学史」の知識をまったくもたずに哲学対話の実践をおこなうことは原理的に不可能である。もし哲学史の知識を否定する実践家がいたとしても、その人物から哲学史の知識を完全に消し去ってしまうことはできない。問題は哲学教育をまったく受けておらず、哲学史の知識をまったくもたない実践家が哲学史の知識をもつことの是非についてである。つまり、まったく哲学史の知識をもたないファシリテーターが哲学対話をうまく運営することが可能なのか。（ここで言う「哲学史の知識が必要か」というのは、対話のなかにデカルトやカントの名前を挙げ、彼らの文言を引用するというものでないことに注意しなければならない。）

スタイルにもよるが、哲学対話において主題となる問いは、ある程度具体的な問いの提示から始まり、雑多に集められた問いから抽象的な問いを取り出していくという作業を行う。「なぜ友達と喧嘩してしまうのだろうか?」、「みんなと仲良くしなくちゃダメ?」、「嫌いな人がいるのは悪いこと?」といった問いを集めてゆき（これ自体がすでにある程度抽象的ではあるが）、そこから「友達とは何か?」「友情とは何か?」といった問いへとどんどん抽象化のレベルを上げていく。もちろん抽象化のレベルを上げれば良いというわけではなく（もし様々な問いを究極的に抽象化すると、「在るとは何か?」になってしまうだろう）、対話の性質、参加者の性質に応じた適切な抽象化の度合いがあるわけだが、余りにも具体的過ぎる問いを哲学対話として成立させるためには、それこそファシリテーターによる会話内部における能動的な抽象化への介入が必要になってしまうだろう。よって、この対話の問い決めの一連の作業において、ファシリテーターは「哲学的な問いとは何か」に対する選定眼をある程度持ち合わせていなければならないということである。哲学史を概観すれば、これまで哲学者たちが一体どのような問いに目を向けており、それをどのような仕方で問うてきたのか、いわゆる「ケーススタディー」をすることができる。このような選定眼は、誰がどう見ても哲学的な問いを選ぶときよりも、一見すると哲学的かどうか分からないが、その奥に哲学的な問いが潜んでいるような問いを見極めるときに重要になってくる。

また対話においても、このような選定眼は必要とされる。もちろんファシリテーターは参加者の発言のまとめ役、交通整理として以上に対話に対して介入的であるべきでないという立場もあるだろうが、その交通整理をする際にも、どの発言が哲学的に拡がりをもつか、またそうではないかの基準をファシリテーターは持ち合わせている必要がある。ここでも、ファシリテーターは参加者と同じ参加者であるべきで、参加者が問いに対して迷っていたならば、それと同じ視点に立って迷うべきであり、安易な交通整理をするべきでないという意見もあるだろう。これは当然のことであり、「哲学対話」である以上、テレビ番組の司会者のように参加者の意見を要約して話を流してゆくべきではない。そういう意味では、交通整理も必要最小限であるべきだという立場にも説得力がある。しかしやはり哲学対話のファシリテーターとして参加する以上、哲学的な発展の可能性がありそうな発言に敏感に反応すると言う意味で、上記の問いの選定眼と同じく、哲学史を学ぶことによる感度の発展は重要になってくるだろう。

そして最後に、哲学史を学ぶ、そして哲学書を読むという行為自体が、過去の哲学者たちとの良質な対話そのものであるという事実が挙げられる。哲学対話が哲学の実践であるならば、哲学者たちが自らの哲学書において展開している思想は、まさに彼ら自身の自らとの対話の軌跡であり、そこに読者として参加するということとはとてつもなく良質な対話体験である。良きファシリテーターを作る要素に良質な対話の体験というものがあるならば、過去の哲学者たちとの内的な対話こそ、良きファシリテーターへの最良の道であると言えるのではないだろうか。